

●水環境・河川・流域(4) (1-A-15-4～1-A-16-4)

このセッションでは河川水など水環境の有機物汚染の実態が報告された。

1-A-15-4 では、茨城県の 38 河川と 1 湖沼における BHT とそのフェノール誘導体((2,6-DBP, 2,4-DBP, BMP, 2-BP, 4-BP, 2,4-DMP)の実態調査結果が報告された。分析された 7 種類のうち、BMP 以外の 6 種類が検出された。その起源として、家庭や工場からの雑排水が挙げられている。

1-A-16-1 では、1996 年から進行しているパルプ漂白方法の塩素漂白から無塩素漂白への転換により、国内のパルプ漂白工場からの有機塩素化合物(クロロホルム, クロロフェノール類, AOX)の発生量と排出量が著しく減少したことが報告された。

1-A-16-2 では、宮城県の鉛川のエストロゲン様活性の供給源が、上流部に位置する廃バッテリー再生事業所で溶解炉関連工程であることが報告された。また、エストロゲン様活性の低減化に粉末活性炭が有効であることが確認されている。

1-A-16-3 では、徳島県の冷田川を対象に 7 種類のパラベン類(methyl-, ethyl-, n-propyl-, i-propyl-, n-butyl-, i-butyl-, benzylparaben)の河川水中濃度と残留性が報告された。河川中で検出されたのは methyl-, ethyl-, n-butylparaben の 3 種であった。パラベンの河川水での残留性は、光分解性、生分解性、そして底質への収着性によって評価された。

1-A-16-4 では、大阪府の淀川と猪名川の河川表層水を対象に、ヒトのレチノイン酸受容体 α に対する結合性の調査され、その結果、これら河川の全流域が環境レチノイドにより汚染されていて、その程度は従来の内分泌攪乱物質に比べて深刻である可能性が指摘された。

なお、1-D-09-1 がこのセッションの追加発表として行われた。

(人間環境大学人間環境学部 長井 正博)